

## 豊かな二学期

# 生活の姿

### 今と昔

前方見渡したところ二皿ほどは、ふさふさとした黄金の稲穂が敷きつめられたようにみのり、その先の堤防の上を往来する牛車の歩みが小さく動いて見える澄み切った空のもと、畔道に出て「突撃」と声をかけて、うしろから見守っていけば、大和川の土手まで、何の心配もいらなかった頃のこと、なつかしい。

その頃の子どもたちは、交通戦争ということばを聞かずにすんだ。枯れすすきの穂をふりかざし、棒切れを腰にさし、またぬいてかまえながら、草むらにかくれ、そして追いかっこをしながら、どこまでも進んで歩いたのである。教師はただ、うしろからついていけばよかった。

足もとは、小さい赤い花、また、白や黄のあるかなきかの

## 萬代彰子



わいい花が、せい一ぱいに咲きほこり、種子をつけ、地の底から声が聞こえて来そうな豊かなみのりがあって、女の子たちは、草の花を摘んでは楽しく遊んだものである。

洋服のすそは、虫がいっぱいついたようないのこずちの種子にとりつかれ、草むらのあちこちにおろぎが逃げこむのを、つかもうとして追いかけた思い出。長い長いみのりの秋をほんとに感激して過ごしたことである。

今、このような話を出してみても、どう想像してもわからない都会周辺の住宅の建てつまり、交通のほげしき、バス路線が縦横に通って、園外へ出での保育の試みは、歩いてでは絶対不可能になってしまった。やむを得ず、門の前からバスに乗っての遠出、家庭にあつては、マイカーと、歩くことを忘れた子どもたちが、もやしのように育っている。

考えさせられる世の中になってしまった。

## —— 二学期に思う ——

二学期といえ、夏の休み明けから、きびしい寒さを迎えるが、楽しい正月休みまで、一年の三分の一の四カ月である。

幼稚園生活最後の学年でもあればなおさらのこと、一年のうち最も充実した、みどり多い学期である。大部分の幼稚園が、五歳児一年間の保育をするところであれば、これまた、かけがえのない四カ月である。

ことし四月以来、はじめて五歳児のみの、しかも三〇〇人をこえる独立園の園長となってみて、それがつい先頃まで田圃であったところに、またたく間に市営住宅が建設されたその一隅に、新しく建設された幼稚園であるだけに、子どもも親も、教師も新しい幼稚園づくりに慣れることがたいせつであった一学期を、せい一ぱいに生きて来たわけである。

小さい小学校以上の学級数と人数があり、しかも一学級に一〇人も多い幼児をかかえ、保育室といえ、逆に四分の三程しかない狭いところで、どのように保育効果をあげるかという大きい課題を与えられたのである。

年が明ければすぐに、小学校へ送りこまねばならない子どもたち、やっとわかったかと思う頃に手ばなす仕事を、常にくりかえ

していた方々がたくさんあったのだ、という実感が、やっと自分の身にふりかかって来てわかるというしまつである。

せめて、一年間はじっくりそのようすをみてからでなければ、ほんとうのことはわからないと思うのであるが、今年の子どもは、今年一年しか在園しないのである。

再び、くりかえすことができない二学期なのである。

## —— 生活の姿 ——

(1) その基本になるもの

ひとりひとりのよい点、あるいは指導を要する点がわかり出してくると、何事をするにもそう不安はない。子どもたちも、学級内の子どもの名まえをよく知ることになって、友だち同士の交わりも活発になってくる。担任教師の気心も、なじみ深くわかってくると、安心して遊ぶことができる。

つまり、お互いの心が開かれてくる。思っていることが自由に話せるようになる。大変望ましい関係になってくる。すると、ついつい遠慮がなくなつて、自己主張が盛んになり、この子どもが、こんなにと、驚くような姿を発見することがある。友だち同士の衝突も多くなる。猫をかぶっていたということでなくなるのである。

子どもが、自分の意見をはっきり出せるようになることは、ま

ことにうれいことである。どんな小さいことにも、自分はこう思うと言いつける人間になる基礎の指導がそこに生まれるのである。

子どもが安心してものが言える雰囲気、それは、ことばの指導として急に意図してできるものではない。

一、担任教師が好きでたまらないと子どもが思う時、二、わたしのことは、先生が一番よく知ってくれているという安定した心を持つ時、三、わたしにはこんなことができるのだという自信ができて来た時、

つまり、学級内の人間関係が、それぞれにあたかいかい心のつながりを持ち得た時、たくまずして、自分の力が発揮でき、満足した生活が送れるようになるのである。

幼稚園と小学校との教育の違いといえば、いうまでもなく、小学校はいわゆる教育の内容が問題であるのに対し、幼稚園で教育される大きいねらいは、内容もさることながら、どのように学ぶかという態度の方が問題なのである。

子どもが自ら、自分以外のものや人に対しどのように接し、どのように自分とのかかわりあいを認めていくか、外界のいろいろな物事を認識し、正しい理解を深めていくかということがたいせつなのであって、そのパロメーターとして、ことばの問題が根本になるのではなからうか。

ことばといえば、教育要領では「言語」の領域であると、一口に片づけられてしまつては困るのである。

特に、二学期に限つたことでなく、幼稚園生活全般に言えることではあつても、タイミングとしては、一応の集団生活にも慣れ、集団のよろこびや、ルールを守ることも身について来て、積極的に遊ぶようになり、個々の力が最も充実されるこの二学期にこそ、ことばを通して人間の高まり、深まりを意図しなければならぬ、と言いたい。

都会では、無理かもしれない虫とりを中心とした保育から、運動会前後の体育的な遊びを経験し、豊かなみりの自然に接し、収穫のよろこびを味わい、集めたり、分類したりかぜえたり、くらべたりする生活、そして、いろいろの素材をつかつて、構成したり、描いたりする表現活動、思いきり身ぶりリズム運動で、みたこと、感じたことを表現するなど、あらゆる生活経験の中で、ことばの生活をぬきにして考えることはできない。

音声を出して「言う」「話す」という場合だけでなく、「聞く」「理解する」という大事な経験は、特に言語取得期の指導には、欠くことのできない重要な問題をかかえているのである。

## (2) 保育形態

幼稚園生活が、集団の場であることは、家庭生活とのいちじるしい相違点であり、そこで集団指導が行なわれてあたりまえのこと

とである。ところが、集団生活において社会性を身につけさせるという目標のために、その方法をあやまって解釈をしていることはないか。

登園して来た子どもたちが、思い思いに自分の遊びを選んで、物を媒介とし友だちと協力して熱心に遊びはじめたら、それはよい方であるが、何とはなしにぶらぶらして、まだ先生が呼んでくれないが、今日は何をするのだろうかと思って、遊びに熱中できない子どもの姿をみつけたとすれば、それは、幼稚園の保育の正しいあり方が行なわれているとは言えない姿である。

しらすしらすのうち、一日の保育形態が子どもが幼稚園というところへ来るようになってから、身についてしまった考え方を決定する大きい役割をもっているのである。

保育は、子どもが登園してから、さようならと帰っていくまで、引きつづき行なわれているものだと、観念的に理解していても、やはり、部屋の中へ入られて、教師の側から、周到に用意された計画によって、無駄のない生活を経験させることが望ましい保育である、という考えが根強く残っているのではないか。

もちろん、その保育がすべていけないというのではない。一学級が定数をこえる人数であり、いろいろなことを、子どもの自主性を尊重して望ましい保育を展開するには道具が足りない、場所がない、という場合もある。

また、これこそはと、教師の側から、子どもの眼を開いてやるために、与えることがたいせつなこともある。

したがって、その園の環境、子どもの実態の上で、一斉に指導されることがあっても、それだけが集団保育であり、社会性を身につけるための幼稚園教育であると誤解してはならない。

入園当初は、幼稚園のいろいろな生活の場を集団で指導することが多かったと思うが、ほんとうの集団生活がスムーズに行なわれるためには、個々の子どもが、自発的、自主的に行動することができ、自分を確立するとともに、相手の尊厳さが理解されるような個々の場面をもっともっと多く遊びの中で展開させる必要がある。

四月のはじめも、二期の中頃も、幼稚園の保育形態が、いちじるしく変化をみせないということであれば、子どもの成長と共に歩んでいるとは言えない。

昨日の子どもと、今日の子どものは、決して同じでない。その子どもの姿を、つぶさに観察し、その時、その時に必要な助言や指示が与えられる保育形態、それは、ある一定の保育形態があるのではない。しかし言えることは、子どもが自ら選んで生活する場と、時間とを、より豊富に用意する必要があるということである。

二期は、思い切って、子どもがどのように自分の遊びを進めていくことができるかを試してみてはどうであろう。



発言をとりあげる時の態度。

それ自身が、子どもたちの「聞く」態度を育てる指導である。さきにもふれたように、「言語」の指導だから、特別にすることいかまえてなく、常に気がつかないところに「言語」の指導の場面がたくさんあり、それが、知識を受け入れる重要な門戸であることに気づかなければならない。

たいせつなことは「聞いている」という現象でなく、「聞く」とする「意欲の問題である。それは、「見ている」のでなく「見ようとする」意欲のあるなしが問題であるのと同じである。ほんとうに新鮮な感激をもって、聞いたり見たりする子どもをつくるのが、幼稚園での使命ではないかと思う。

本来、子どもは、自分のまわりのものを知りたい、理解したいという気持を一ぱいもっているものである。それがいつの程にか、感激のない無神経な子どもにしてしまっているのは、幼稚園の保育形態や、その内容によるのではないかと思う。

知的な生活は、小学校へ行ってからと決めてしまえば、子どもは、高い知的な生活をするのが可能である。

「聞く」ということが正しく完全にできておれば、子どもは、より高い知的な生活をするのが可能である。逆に、いいかげんな聞き方しかできない子どもにしてしまっているから、学校生活の当初から問題児をつくってしまうことになる。

りかねない。

### —— おわりに ——

何をさして充実した生活と言えるのであろうか。

幼稚園という集団生活の中で、子どもが身につけて来たあらゆる力を出しきって生活をし、そして日に日に新しい経験の積み重ねから、知的に吸収していく量が多いこと、それは心身ともに安定した状態にしてはじめて可能であること、など、第二学期にこそ、それが言えるわけである。

もっと具体的な生活の場面を出して言うべきであったと思うが、幼稚園生活の充実期の指導で特にとり出した「聞く」ということを中心とした「ことば」の指導の面は、幼稚園生活全般にわたって根本になる問題であり、最近、特に気になる問題でもあるので、とりあげた次第である。

収穫の秋、天高く気澄みわたる好季、一年中でもっともよい気温が長くつづき恵まれた自然の豊かな恩恵に浴することができ、第二学期、大いに秋の自然にふれ、野外に出て、つとめて歩くことをさせ、また戸外運動を楽しむとともに、遊びや仕事に熱中できる態度を身につけさせるとともに、勤労のよろこびを感じさせ、また人に感謝できる態度が身につけてこそ、充実した生活ができたと言えるのである。

(大阪市立長吉第二幼稚園)